

サンタは良い子になれ
ない

亜梨亞

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリスマス前になるとやさぐれるサンタ。

理由は至極単純。忙しいから。

そんなやさぐれサンタも、「悪い子」にはなれないのだろう。
やさぐれサンタとトナカイと、悪い子のお話。

サンタは良い子になれない

目次

サンタは良い子になれない

「クリスマスなんて来なけりやいいのに……そしたら俺仕事しなくていいのに」
「サンタが言う台詞じやないだろ」

「だつてそうじやん！世間はやれ聖夜だイルミネーションだとカツプルや家族でキヤツキヤウフフしてるくせに！俺はその時期子どものためにめつちやくちや頑張つてプレゼント調達してるんだぜ？！俺だつてニンテンドースイッチ欲しいよ！ポケモンやりたいよ!!」

「子どもには絶対見せられないサンタの姿だな……」

「うるせえよヒトヒトの実も食つてないくせに人の言葉喋りやがつて。鼻青に塗るぞ」

「それやつたら困るのあんただろ」

「あーあ。クリスマスの日つて寒いんだよな……おいトナカイ。なんかの間違いでお前足大怪我とかしない？そしたら当日サボれる」「途轍もないブラツクなこと言つたな今」

「深夜働かせるこの仕事こそブラックだよ」

「あんたは一度ブラックサンタに連れ去られるべきだ」

「何よりもめんどくさいのはこの子どもの手紙を読んでるこの時間なんだよな」「お前ホントにサンタか？子どもに夢を与えるサンタなのか？」

「いや、勿論子どもの無邪気な手紙はいいんだぜ？」「にんてんどーすいっちがほしいです」とか「でらつくすじくうどらいばーがほしいです」とかは可愛いもんだし、よーしじゃあ頑張つてシルバニアファミリーのお家作っちゃるけんね！ってなるじやん」

「そこはちゃんとスイッチとジクウドライバーを作れよ」

「ただそういうのに紛れて冗談半分で中学生高校生くらいの字で「彼氏が欲しい」「彼女が欲しい」って書かれてるのを見るとめちゃくちゃムカつくんだよな。自分で作れバーカ！シルバニアファミリーの比較的ブサイクな人形送り付けてやろうか！？「これがてめえの彼女だ！ほら愛でろ！」って

「意味不明な方向で八つ当たりするのやめてくれないか？」

「そりゃあ八つ当たりしたくなるよお!? 今めっちゃ忙しいんだもん！トナカイお前も手伝えよ！」

「手伝うつつたつて俺おもちやとか作れないし」

「お前ミニチュア化したらシルバニアファミリーのお人形さんになれるだろ」

「無茶を言うな」

「それをムカつく中学生や高校生に送り付けるから」

「それは暗に俺がブサイクだと言つてるのか？」

「そもそも俺つてサンタの中でもダメな方のサンタだからさー！給料も少ないので前を頑張つて養つてるんだぜ？！ちょっとくらい恩返ししてくれたつていいじやんかよ！」

「悪いな、俺ガラル地方出身だから恩返しは覚えないんだ」

「なんで最新のポケモンで恩返し無くなつたこと知つてんだよお前。トナカイのくせに」

「買つたから」

「お前ホントムカつくな！？俺が必死におもちや作つてる横で子ども達がやりたがつてるポケモンやつてんの！？俺だつてやりてえよ！」

「そもそもお前に恩返ししても効果無いだろ、万年金欠で亡靈みたいに腹空かせてんだから」

「人をゴーストタイプ呼ぼわりするのやめろ」

「くそお……俺だつてポケモンやりてえ……キャンプでかつこいいポケモンとカレー食べたい……」

「やたら俗に染まつたサンタだな……」

「せーの！ 言いたいことがあるんだよ！ やっぱりカレーは美味しいよ！ 好き好き大好きやっぱ好き！ やつと見つけた王子様！ 俺が生まれてきた理由！ それはカレーを食べるため！ 俺と一緒にガラルを歩もう！ 世界で一番愛してる！ あーい！ し！ て！ るー！」

「お前の見つけた王子様レトルトカレーじゃねえか」

「なんでそんなに辛口なの？」

「面白くねえんだよ」

「ちなみにカレーの王子様は甘口」

「聞いてねえ」

「あー……手紙読むのがしんどくなつてきた」

「子どもの夢の結晶だろ。頑張れや」

「なになに……「じゅうしんさんだーらいがーがほしいです」……無理だ！ それは普通に無理だ！ 人体鍊成は無理だ！」

「それ本当に子どもか？」

「たまにあるんだよな、ウケ狙いで大して面白くもない願い事書く中学生」

「身も蓋もない言い方したな」

「ほんと、頼むから夢もへつたぐれも無いひねくれて拗らせたガキは斜に構えるのをやめてくれ……」の手紙はどうだ？えらい長いな……」

——わたしは、サンタがきらいです。クリスマスがきらいです。

「奇遇だな、俺も嫌いだ」

「いいから読めよ」

——わたしは、きよねんはプレゼントをもらえませんでした。そのまえのとしも、プレゼントをもらつていません。わたしは、今までサンタからプレゼントをもらつたことがありません。

サンタは、いいこにしかプレゼントをあげないつてきました。わたしは、いいこだつたのに、プレゼントをもらつたことがありません。だから、わたしはサンタがきらいです。クリスマスもきらいです。

わたしは、おとうさんとおかあさんがいません。おかあさんは、まえのまえのとしにしんじやいました。おとうさんは、このまえ、とつぜんあえなくなりました。いまは、じゅんやおにいさんというひとがおとうさんのかわりです。じゅんやおにいさんは、「おまえはうられた」つていつてました。

わたしのいえは、とてもびんぼうでした。おかあさんのいいつけで、スーパーからたべものをなんどももらつてかえりました。おかあさんはわたしがたべものをもらつてかえつてきたら、いつもとてもほめてくれました。「どうぼうじゃないの?」つてきいたら、「おかねがなくてかわいそうちだからゆずつてくれるのよ」つておしえてくれました。

おかあさんがよるにでかけると、おとうさんとたくさんあそびました。はだかでプロレスごっこをなんどもしました。たまにすごくいたかつたけど、とてもたのしかつたです。たまに、おとうさんのともだちともプロレスごっこをしました。おとうさんのともだちは、かえるときにわたしにアメをくれました。

——ほんとうは、おかあさんのいうことも、おとうさんとしていることも、いけないことだつてしつっていました。わるいことだつてしつていました。けど、わたしはそうするしかなかつたんです。それが「いいこと」だつておしえられてきだし、なんどもなんども、わたしはおかあさんにもおとうさんにも「いい」だつてほめられたんです。

いまも、プロレスごっこはしています。じゅんやおにいさんや、おにいさんのともだちとまいにちしています。プロレスごっこをしているわたしが、じゅんやおにいさんにとつて「いいこ」だからです。じゅんやおにいさんにとってわたしは「わるいこ」になってしまいます。わたしはおにいさんにとってもおこられます。なぐられて、けられます。サンタにとって、わたしは「わるいこ」ですか？おとうさんやおかあさん、じゅんやおにいさんにとってとっても「いいこ」なわたしは、サンタからみたらとっても「わるいこ」ですか？

サンタはいいこにしかプレゼントをわたさない、つていていますが、その「いいこ」つて、どんなこですか？

——サンタさん、わたしはきっとわるいこなので、プレゼントはことしはいりません。でも、もしこのてがみをサンタさんがよんでもくれたら。ひとつだけおねがいがあります。

わたしを、いいこにしてください。

「トナカイ、この手紙別のところに置いといて」「んあ？いや別にいいけど、どうしたんだよ急に」

「その手紙が送られてきた住所、あとで調べる。あとプレゼント作る作業、そろそろ並行して本格的に進めたい」

「本当にどうした急に？締切直前の作家みたいになつてるけど」

「まあな。どうせなら名作を書き上げたいじゃん」

「手遅れだぞ」

「あと俺の銀行の預金残高調べなきや」

「ゼロだろ」

「いや流石にそんなことはない……はず。サンシャイン芸人だつて預金残高幾らかはあつただろ」

「毎日空前絶後の超絶怒涛の金欠サンタだろ、あんたは」「返す言葉もねえ……」

「……なあ、トナカイよ。あんたから見て俺はどんなサンタだ？」

「ろくでもないサンタだな」

「やつぱり？」

「やつぱり」

「ろくでもないサンタなら、良い子悪い子普通の子、どの子にプレゼントを渡すべきだと

思う?」

「今更欽ドンかよ……というかどんなサンタでも良い子に渡すべきだろ」「やつぱり?」

「やつぱり」

「……まあいいや!俺はこの子を「良い子」と認めることにしよう!だつて俺つてばろくでもないサンタさん~!」

「そうやつて給料天引きされるんだよな……」

「うるせえ!やり甲斐までなかつたらいよいよもつて俺はこの仕事やめるわ!」

拝啓、罪も無き麗しき彼女へ。

手紙は確かにこの私、サンタクロースが受け取った。君の素直で純粹な心も共に。

世間一般から見たなら、君は確かに「良い子」とは言えないだろう。或いは悪い子とも言える。当然だ、竊盜や援助交際、近親相姦を「悪いこと」だと知つていながら行っていたのだから。君の母親や父親、じゅんやおにいさんという人からすれば都合の「良い子」であろうと、君が生き抜く為に仕方無からうと、きっと君は「良い子」とは言われない……かもしれない。

私も、実は「良いサンタ」では無い。……いや、ブラックサンタでは無いのだが、な

んというか……「良い子」とは言えないサンタなのだ。

そんな「良い子」とは言えないサンタなので、君の手紙を受け取った時、「じゃあ今年は残念だつたし来年頑張つてくれたまえ」とは言えなかつた。良い子ではない君だが、私は君にプレゼントをあげなくてはならない、と思つてしまつたのだ。

君は「わたしをいいこにしてほしい」と書いていたね。私にはどうしたら君の望みを叶えてあげられるか、全く解らない。

だから、私はこの手紙を君にプレゼントすることにした。もし、君が。決して「良い子」とは言えない私のようなサンタを信じてくれるなら。一度だけ、サンタを、クリスマスを好きになつてくれるなら――

（）

「クリスマスなんて来なけりやいいのに……そしたら俺仕事しなくていいのに」

「サンタが言う台詞じやないだろ」

「今年に関しては俺マジで人気のおもちゃとかゲームとか知らないんだもん！トナカイ、お前去年めっちゃポケモンやつてただろ？今年のトレンド知らないの？」

「残念ながら今年は俺も解らん。去年より貧乏極めてんだからゲーム買ってないの？」

「だよなー。あー……もう手紙読むのもめんどくさい……この仕事やめたい……」

「毎年この時期になると絶対子どもには見せられない絵面になるな……」

「もー！お兄さん絶対サボつてると思った！はい、これ今年のおもちゃトレンド調べてきたやつ！手紙はまとめてそつちの机にまとめといたからちやんと読んでね！あと昨日見たけどソリ壊れかけてない？トナカイお兄さんにも迷惑かかるんだからちやんとメンテナンスしなよ！……私疲れたから寝るね」

「……お、おう。サンキュー。おやすみ」

「おやすみ……あ、そうだ！そのおもちゃトレンド、女の子向けだから男の子向けのトレンドはちゃんと自分で調べてよね！」

「……なんというか、この一年でめちゃめちゃ「良い子」になつたよな」「今年こそは形になるプレゼントを枕元に置いてやれよ」

「そうだな……あいつ何が欲しいんだろう」

「今寝たんだろう？ 枕元とかに手紙置いてねえの？」
「確かに！ 確認するか……わかんなかつたらシルバニアファミリーのお家作っちゃるけ
んね！」

「お前シルバニアファミリー好きだよな」

——サンタさんへ。

わたしはことし、とつてもいいこにしていました。

とつてもびんぼうなくらしだけど、まいにちがとつてもたのしくて、しあわせです。
だからおねがいです。

サンタさん、わたしにすてきなあしたをください。

「…………金無いけど、美味しいもんでも食わせてやるか」
「本当、「良い子」に育つたもんだよ」